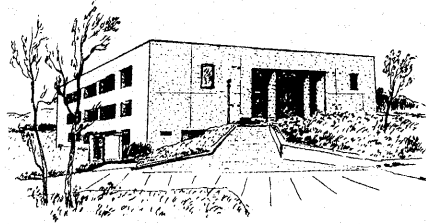


福島大学附属図書館報

書 燈



No. 30

2003. 4. 1 発行

〒960-1293 福島市金谷川1番地  
TEL (024) 548-8083  
<http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/>

福島大学附属図書館

## 前向きに行こうぜ

荒木田 岳

「使えない図書館だなあ」という声を赴任以来何度か聞いた。本学の附属図書館に対する意見であるが、どうもそれには2つの意味があるらしい。

しかるべき場所に図書が並んでいないという意味と、蔵書が少ないという意味の2つである。前者については、昨年度、行政社会学部の教員が提案して図書館整理ボランティアを組織したことがあり、自身のHPにも思うところを書いたことがあるのでここでは繰り返さない。今回は後者の「蔵書が少ない」ということについて書いてみたい。

蔵書が少ないことは、地方大学ではさほど珍しいことでもない。むろん、それを是認するつもりはないが、少ない蔵書を嘆くよりも「蔵書の少ない図書館には、少ない図書館なりの使い方がある」と考えた方が生産的ではないかと思うのである。

地方の国立大学で修士課程時代を過ごした者として、自らの経験を述べたい。基礎文献の所蔵すらあやしい大学で研究を続けることは「スリリング」である。今ほどコンピュータ入力も進んでいなかったため、どうせ見つからないだろうな、と思いながら日々図書館に向かった覚えがある。

目当ての本が見つからないときにどうするか。当時も、国立大学相互貸借で他大学から取り寄せるという方法があった。しかし、2冊の本を取り寄せて、夏目漱石が3人ほど手許を去るのを見て、財力が研究の行く末を決する、という思いを強くした。これでは研究を続けられない、と思った。

その後、気を取り直して、蔵書が少なくても書ける方法を考えることにした。研究環境が研究を左右するのは事実であるが、それを超える研究方法を持てば、そのハンディは克服可能だと考えたのである。

つまり、「当該資料を取り寄せるコスト」と「取り寄せて得られる知見(=ベネフィット)」を比較して資料収集を厳選し、資料の欠如はイメージで補うということである。そのためのイメージを豊かに持てるかどうか、鍵を握ることになる。

そう書くと、原資料に当たることが研究のイロハだ、という反論は必至である。しかし、ない袖は振れない。これは経験したものにしかわからない「痛み」であろう。他方、膨大な資料が手許にはない代わりに、時間が残った。この時間を使って「論理的な枠組みを鍛えイメージを豊かにする」という方法を重視した。ところが、これは精神的なプレッシャーである。手許のカードは少なく、思い悩む時間は無限に存在するからである。

しかし、体を動かし、「いい汗」をかくことが少ない分、いかに作業が進行していないかをリアルに自覚することができるのはメリットでもある。

おおよそ上記の意味で、地方国立大学で学ぶことにはメリットがあると、私は思う。「お付き合い」が少ない分、自分自身と向き合って、強靱な精神力を養うことができれば、それは一生の宝になるはずである。

「世の中は実に不公平である。不公平を是正できなければ、与えられた条件下で、よりよい成果をあげるしかない」。そんな貧乏なことを書かせる、今日の時代風潮を恨まずにはいられない。しかし、その風潮を自らも担っているわけで、問題は、そうした被害者意識を超えて、どういう学問的展開が社会的に可能か、という点にあるのだろう。

「短い学生生活、前向きに行こうぜ」

(行政社会学部助教授)

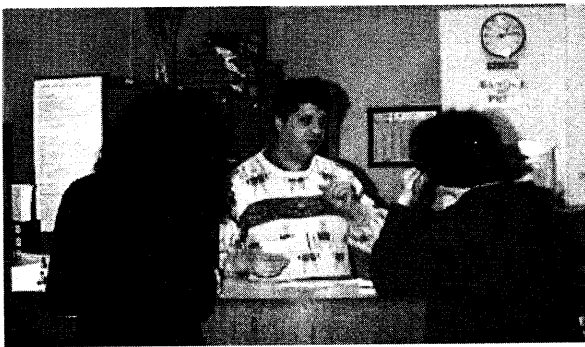
# フランス国立教育研究所図書館

—Institut National de Recherche Pédagogique—

荻路 貫司

私は、1996年6月から10カ月間、文部省長期在外研究員としてフランスを中心にヨーロッパへ出張しました。その間、ヨーロッパ5カ国の図書館を訪れましたが、ここでは、そのとき主たる研究受け入れ機関としてお世話になったフランス文部省所管のINRP（国立教育研究所）の図書館についてお話ししたいと思います。

INRPは、フランスにおける義務教育制度黎明期の1879年にパリに設立されたフランス文部省の「教育博物館」の後身であり、第二次世界大戦後、IPN（国立教育研究所）、さらにINRDP（国立教育研究並びにドキュメント研究所）を経て、1976年に現在のINRP（国立教育研究所）になりました。教育の全階梯に関する研究をその使命とする研究機関であると同時に、フランスにおける教育に関する全国的な資料センターとしての役割も担っています。



カウンター 図書館カウンターは利用者への対応で毎日忙しい。

INRPの組織、活動に関していえば、教育全般、とりわけ教育史、教育社会学、教育心理学、教科教育学、教育技術、学校環境、教員の健康と養成などを対象とし、それらの研究を進めるための研究部門を擁しています。そして、上に掲げたそれぞれの領域における課題研究と共に、領域をまたがった横断的な研究も行っています。また、それらの研究は、研究所内のメンバーだけでなく、広く大学並びにCNRS（国立科学研究センター）所属の研究チームと共同で実施され、さらに、1,200名以上の現場の学校教員も参加しています。その他、INRPは、国内的また国際的に研究者の集う場所として、研究のコロキウム並びにセミナーを開催しています。また、研究成果の普及のために、教育領域に関する多くの研究書籍ならびに定期刊行物の刊行も行ってい

ます。

こうした幅広い活動を行うINRPの図書館は、後に「公教育に関する中央図書館」と名付けられることになる「初等教育中央図書館」として1879年の「教育博物館」の誕生と同時にパリに設けられました。それ以後、教育に関する専門図書館として、研究の発展と教員の資質向上のために活動しつづけてきています。また、文部省の図書館として、中央教育行政にも重要な役割を演じてきました。

同図書館は、「教育博物館」から図書館部門を独立させた1932年のCNDP（国立教育ドキュメント・センター）の発足と同時に、現在の場所である、パリ左岸カルチュ・ラタンのウルム街に移りました。有名なパンテオンの近くに位置し、



玄関 研究所の玄関にはルアンへの統合移転に反対するメッセージが掲げられている。

多くの科学者、文化人、政治家を輩出したフランス随一の有名グラン・ゼコールであるエコール・ポリテクニック（理工科学院）と同じ通りに面しています。ソルボンヌ（旧パリ大学）も遠くない所にあり、まさにその活動にふさわしくフランスの学術の中心に位置しているといえましょう。

INRPの図書館となった後、「歴史コレクション」部門が北部の古都ルアンに移り附属の国立教育博物館として独立しましたが、パリ・ウルム街の本館には教育研究の全領域をカバーする550,000冊の書籍と約5,000種類の定期刊行物が所蔵され、教育関係者を中心に広く利用されています。フランス並びに世界の教育行政と統計ドキュメントの所蔵において特に優れています。また、16世紀から今日までの教科書、教育論文、教育構想・法案、教育関係行政資料・統計等の文庫、コレクションは見逃すことのできない貴重なものといえます。（教育学部教授）

## 思い出の一冊

## 無着成恭編『山びこ学校』

大川 裕嗣

雪がコンコン降る。  
人間は  
その下で暮しているのです。

(石井敏雄「雪」)

この短い詩から、あなたはどんな「暮らし」を思い浮かべるだろうか。

山形県南村山郡、山元中学校の生徒43名による文集『山びこ学校』は、1951年の公刊後、たちまちベストセラーとなった。奥羽山脈にほど近い谷あいの村。貧しい家計を助け、学用品代を稼ぎ出すために、炭焼き、蕨採り、兎追い、稲背負いなどと学校を休んでまで忙しく働く子どもたちの姿は、当時の読者にとって、自らの少年時代そのものでもあった。

子どもらの心に深く分け入り、その生活を綴方(つづりかた=作文)や詩に表現させ、更には村の現状や将来像についての研究をまとめさせる青年

教師、無着成恭の力量は人々を驚かせたが、それにもまして、自分たちと社会の現在と未来をしっかりと見据え、互いを気づかいあう生徒らの姿に、敗戦後まもないこの国の人々は、ほのかな希望を見いだしたに違いない。

佐野真一『遠い「山びこ」』や生徒の一人、佐藤藤三郎の著作に明らかのように、生徒たちのその後の人生は決して平坦ではなかった。村を去り、後には教壇をも去った無着には、厳しい批判も寄せられた。だが今日なお、『山びこ学校』はその輝きを失っていないと私は思う。

戦後の農村史を研究するために山形や岩手の村々を訪ねるとき、

私は、遠い昔、母に薦められて読んだこの本を、鞆に忍ばせるのだ。

(経済学部)



## 図書館活用術を身につけよう！

— カウンター  
の内側から —

佐藤 良子

図書館のカウンターに座ってもうすぐ1年になります。うーん、年月と仕事技量の上達が比例していないところが痛い。ただ図書館を活用するための知識は日々蓄積されつつあります。しかしできるならばこの知識を学部時代にゲットしたかった。

図書館を使いこなす。これはとても至難の技ですが、せっかく大学にいるのに、膨大な書籍と有用な設備、そして各種サービス(大学図書館限定サービスもある!)を使わないでおくのは、まさに宝の持ち腐れです。また「本を探す」という行為を軽視してはいけません。これはひとつのツールです。知りたいことを調べるための「お役立ツール」を充実させることは重要だと思います。学部時代、私は活用したくないからではなく方法を知らなかったから活

用できなかった。それを考えると、図書館と大学が連携して図書館を徹底的に利用するような講義ができたらいと思います。しかし本当に必要なのは利用者自身のやる気です。積極的に利用することこそが図書館活用術修得への近道です。

図書館活用術を身につけられるかどうかは、あなた自身にかかっています。是非ゲットして下さい。

(行政社会学部地域政策科学研究科2年)



## 「電子ジャーナル」ってナニ？

福田 一彦

むかしばなし： 年をとると昔話がしたくなると言いますが、私もそういう年齢になったということでしょうか。私が福島大学に赴任したのは15年前ですが、まず感じたのは物と情報の乏しさでした。ほしい書籍が見つからず、注文しても届くのに3～4週間もかかりました。当時Amazon.comはありません。私の専門は生理学と心理学の境界領域ですので、医学系雑誌の情報は欠かせませんが、学内では見たい雑誌が手に入りません。当時はよく県立医大の図書館を利用していましたが、頻繁に通える距離ではありません。これは研究者にとっては死活問題です。そこで、福島大学に来てまずやったことは、データベースへの接続でした。当時は、インターネットも無ければ学内LANもほとんど整備されていない状況でしたので、研究室のパソコンを内線電話で（当時、外線は交換手経由！）情報処理センターにつなぎ、専用回線経由で東北大学の大型計算機センターに接続して、そこから大学間ネットワーク（ああ懐かしい）を経由して学術情報センター（現在の国立情報学研究所）や筑波大学につないで文献検索を行いました。データベースの検索後は本学の図書館に出かけて行って複写依頼をするのですが、書類に手書きしなければならず、これが結構面倒で、また当時は複写物が届くまでに2週間くらいかかることも珍しくありませんでした。最近では、データベース検索から文献複写の申し込みまで研究室からオンラインで出来ますし、早いときには2日で複写物が届くこともあります。その意味では、地理的なハンディキャップをほとんど意識しないで済むようになりました。そう、とりあえず現状に満足していたのです。「電子ジャーナル」が登場するまでは！

電子ジャーナル： ところで、本題の「電子ジャーナル」について私も、それ程良く分かっているわけではないのですが、電子ジャーナル（online journal, electronic journal）とはどんな物で、どこが便利でどこが不便なのかについて、分かる範囲で簡単にお話してみたいと思います。紙媒体の雑誌の文字・画像情報全てを電子的に（主にネットワーク

上に）再現したものを電子ジャーナルと呼んでいます。ただし、単なる再現ではなく、電子情報の特徴を生かして雑誌内外の関連情報へのリンクが張られたりしている場合もありますし、電子媒体でしか存在しない「本当の」電子ジャーナルもあります。前半でお話した、文献データベースには、文献の書誌情報や要約が収録され、それが検索対象となっていて要約までアクセスすることが可能ですが、論文自体が必要な場合には、複写サービス等、別の手段を用いる必要があるわけです。ところが、電子ジャーナルでは、検索を行った結果、即座に論文自体が手に入ります。これはとても便利です。形式は主にpdfかhtmlで、pdfの場合、印刷すれば冊子体とほとんど変わりません。では、全てがバラ色かというところも必ずしもそうではありません。文献データベースは主要雑誌を網羅していますが、電子ジャーナルは出版社（グループ）ごとにしか検索することが出来ませんし、アクセス権についてもグループごとにまちまちです。完全に無料配布されているもの、一定期間以前に出版された論文に限って全文を無料配布しているもの、紙媒体の雑誌自体を購入している機関の構成員のみアクセス可能なもの、要約までなら見られるもの、また、登録が必要なものなど色々あるようです。契約条件の変更で突然アクセスできなくなることもあります。このような「不統一・不安定性」が最大の短所ですが、今後改善されていくのではないのでしょうか。現在、本学でアクセス可能なのは、Blackwell Publishers（約260誌）、Blackwell Science（約420誌）、Springer-Verlag Link（約500誌）、Wiley InterScience（約300誌）等で、来年はElsevier Science Direct（約1200誌）が加わります。アクセサビリティの高い電子ジャーナルの登場により、別刷りの流通方式も変わりつつありますし、雑誌のImpact Factorなどの格付けも影響を受け変化していくのではないのでしょうか。

（教育学部助教授）

購入資料案内

## 大型コレクション「健康と社会福祉のための教育」

佐藤 理(教育学部教授)

社会全体として省力化が進み、身体活動の質と量が著しく低下した。このような状況の下で、子どもの体力低下、生活習慣病の増加、ストレスによる問題の増加など、心身に関わる様々な問題が噴出している。環境問題も含め、人間としての本来的な生存自体が危ぶまれるような兆候さえ指摘されている今日である。これらの問題についてより本質的な解決の方向を探るには、これまでの健康科学、体育及びスポーツ科学、福祉、医学などの成果を、その源流までさかのぼって総括し、より本質的な解を求めていく必要がある。

このたび購入の運びとなった大型コレクション Education for Health & Public Welfare; from the "Survival of the Fittest" to "Fitting the Many to Survive" (健康と社会福祉のための教育—「適者生存」から「万民生存」へ) は、16~20世紀の西欧における医療とスポーツ・身体活動に関する古典的名著の集大成である。西欧における健康・医療とスポーツ・身体活動との結びつきの源流はギリシャのヒポクラテスまで遡る。今日のような際だった治療手

段が無かった時代にヒポクラテスは、外界の様々な攪乱要因による健康破綻を防いだり回復させる、本来的に人間に備わる力を「自然治癒力」と喝破したのである。その後、人間らしい生存の基盤を身体におき、人間的発育発達とより良い生存のための体育・スポーツをはじめとする様々な身体技法が追求されていく。

コレクションは、フラーの「医療体操」Medicina Gymnastica第4版1711年刊、メルクリアーレの「体操書」De Arte Gymnastica第3版1587年刊、ロスによる「運動による慢性病予防と治療」The Prevention and Cure of Many Chronic Diseases by Movements初版1851年刊をはじめ、その他ドイツの体育家グーツ・ムーツ、プロイセンの体操教育家ヤーン、スエーデンの近代体育の先駆者リング、ドイツの体操家シュピースなどの代表的主要図書を含む全81点から成っている。

この大型コレクションが利用に供されることによって、身体を核にしたよりよい「万民の生存」への理論構築への道が大きく開かれていくであろう。

購入資料案内

## 『日本近代都市計画資料集成』(全87冊)

不二出版編集・発行

今西 一男(行政社会学部助教授)

現代都市は、単に最近の建設活動の結果として出現したものではない。長年にわたる都市活動の総体として都市は現存しているのである。したがって都市を研究対象とするにあたっては、その歴史をひも解かない訳にはいかない。それはわが国の都市研究でも同様だが、特に戦前から戦後にかけての歴史を網羅すると同時に、その所収をなしている資料が乏しかった。こうした研究者・実務家たちの要望を受けて編まれた資料が、このほどわが附属図書館に所蔵されることになった『日本近代都市計画資料集成』である。

この資料は、『都市公論』(大正8年~昭和20年)、『復興情報』(昭和20年~21年)、『新都市』(昭和22年~35年)を復刻・合本として発行したものである。ただし、これらはもちろん寄せ集めではなく、脈絡を持つ一貫した資料である。

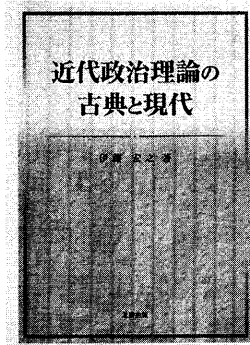
日本近代都市計画の生みの親である後藤新平を会長に、内務省の外郭団体として大正6年に設立された「都市研究会」(現・都市計画協会)は戦前の都

市計画・市政問題全般に影響力を持つ議論を展開した。その論壇こそ『都市公論』である。そこで扱われた、例えば都市公園、区画整理、住宅問題、緑化問題といった特集は、それら今日に続くテーマの基礎を知る上で重要な資料である。

そして戦後、わが国の都市計画は戦災復興の重要な役割を担うことになる。そのための情報を提供したものが戦災復興院発行の『復興情報』である。その発行から1年後、「復興情報・都市公論・合併改題」として都市計画協会から創刊されたものが『新都市』である。つまりこれら3誌は都市研究会の流れを汲み、『新都市』にあっても都市計画にとどまらない論説が掲載されている。この資料には昭和35年までの20巻が収録されたが、いずれも戦災復興から高度経済成長に至る都市全般の論点にあたるための貴重な資料である。

実はこれら一連の資料を所蔵する図書館はまだ少ない。この資料を十分に活用し、また新たな都市研究の展開を図ることを私もめざしたい。

## 学内教官著作寄贈図書を紹介



『近代政治理論の古典と現代』

北樹出版 2002.4

伊藤 宏之 著

(教育学部教授)

グローバリゼーションの波及の中で、深刻化する南北問題の解決策への問いが地球のあちこちから発せられている。本書はこの問い

をふまえて「人類史上の近代」を主導してきた欧米の政治理論の史的検討を試みている。歴史的方法をとるのは、過去が現代をとらえているからである。

個人の自己実現のために、人間は自発的結社（教

会・政党・労働組合など）に参加し、自前では不足する条件整備を国家に求める。この世界に開かれた市民社会を基軸とし、国家を一つの手段とみなす政治理論は、ロックとスミスにおいて古典的構成を整える。しかし、世界市場の確立は、この古典的構成の再編問題を生む。ミルやパーソンズに対抗して、マルクスやラスキは世界秩序を視野に入れて剰余価値と国家の民主的規制による「個人の解放」を説く。これが、近代の初発にホブズの提起した「秩序の問題」への解答となりえているかどうかの検証が21世紀の政治理論の課題である。

(請求番号311.2/ I 89 k)



『西脇順三郎のモダニズム

— 「ギリシア的抒情詩」

全篇を読む—』

双文社出版 2002.9

澤 正宏 著 (教育学部教授)

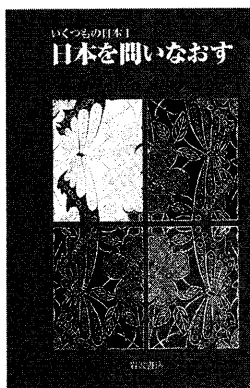
「詩とはなにか」を問うことは文学の最大の課題であるが、時代・社会の変化とともに、その探求を言語で

表現されたテキストでなすことは困難になって来ている。端的に言えば、現代詩を学問として研究することは極めて困難なのである。加えて、日本では小説に比べると詩の研究はそう活発とはいえない、と

いう状況がある。

そこで本書では、日本の現代詩の出発期の、しかも現代詩のパイオニアであった詩人とその詩篇に焦点をあてて、魅力ある表現ではあるが難解な12篇の詩についての総合的な「読み」を試みた。総合的という意味は、テキスト論としての読みも展開するが、詩人に寄り添った実証的なレベルでの読みも展開し、これまで殆ど本格的な研究がなされてこなかった各詩篇の読みを、比較文化、比較文学、表現スタイル、表現方法などの面からトータルに考察したということである。そのために、文学主題の共通性に配慮したり、写真を多用した。

(請求番号911.52/Sa93n)



『日本を問いなおす』

岩波書店 2002.10

(いくつもの日本 I)

工藤 雅樹 共著

(行政社会学部教授)

本書のタイトルには、日本の文化や歴史を単一のものとする傾向があったことに対する反省の意味がこめられている。南北3500キロ

に及ぶ日本列島には、さまざまな気候風土の地域がならびたっており、それぞれに特色のある文化と歴史を育んできた。それにもかかわらずこれまでの日本文化論・日本人論、そして日本歴史そのものも、

そのような違いを無視し、もっぱら飛鳥・奈良・京都を中心とした地域の文化こそが日本文化であり、この地域の歴史が日本歴史の基準とされてきた。日本は単一の民族からなるという議論の根もこのような考えに起因する。

本書ではこのような立場を踏まえて、筆者も含めての10名が考古学・民族学・歴史学などそれぞれの面から「いくつもの日本」を論じている。

ちなみに筆者は「蝦夷とアイヌ」のテーマで、民族としてのアイヌの成立を考え、古代の蝦夷とはアイヌ民族と日本民族がそれぞれ歴史的に成立する過程のなかで理解すべきことを述べている。

(請求番号210.1/A32n)

## その昔 福島大学の近くにあった図書館 (その1) あぶくま山系農村図書館

図書館専門員 渡辺 武房

1959(昭34)年5月21日から1970年頃までの間、安達郡東和町木幡関屋140において活動した私設図書館のことです。同館は同所に住む丹治武正・礼子夫妻(故人)が、本に恵まれない農村の子どもたちのために、約300冊の図書を用意して自宅(約20㎡)を開放して始めたもので、最盛期には約3,600冊を提供しました。蔵書は児童書、小説それに農業関係専門書が主でしたが、図鑑、百科事典などの参考図書もありました。

いつでも、だれでもが自由に利用できるように毎日開放されていて、小・中学生が1日平均8~10人利用しました。夏休みの宿題をしたり、研究課題の調査をする学習の場でもありました。一般図書や資料も所蔵し、集落の人たちに無料で貸し出しました。貸出期間に制限はなく、何日間でも利用ができました。

1966年1月からは、東和町出身の人やこの町に関

係ある人の消息、町に伝わる昔話、針道の馬市などの記事を載せた、機関誌『あぶくまの山さと』を月1回発行し、約1,000



丹治武正・礼子ご夫妻

人の愛読者のもとに配布しました。これらの一部は郡山市中央図書館に所蔵されています。

また、斉藤一郎兵衛著『郷土の史跡をたずねて』(パンフレット)を300部刊行しました。

(参考資料)

- ・「人気の私設図書館 あぶくま山系農村図書館」  
(1967.11.1付『福島民友新聞』)
- ・「あぶくま山系農村図書館」  
(丹治武正 1998.12 調査・回答)

## 遡及入力作業の終了について

情報管理係

平成14年12月に遡及入力作業を終了しました。この遡及入力作業は、入力担当職員(パート)4名を配置し、平成4年2月より10年11カ月にわたって行われました。この作業により、本学図書館が所蔵する資料の99.5%が検索可能になりました。残りの未登録は貴重図書の一部と和古書の一部などで貸出制限のある資料です。これらの未登録資料についても順次入力していきます。

本学図書館の所蔵する図書及び雑誌のそのほとんどが検索可能となったことで、利用者は、複数の目録カードと機械検索を併用した検索上の煩わしさから解放されました。また、本館ホームページ上においても同様の検索が可能ですので、研究室や自宅からでも蔵書の検索ができます。本館を利用している地域の研究者の方々にも便利になったのではないのでしょうか。

遡及入力作業は、国立情報学研究所を中心とした全国総合目録データベースを利用して行い、その登録率は84%を越えました。また、この作業は、単に

目録カードの内容をデータ入力したわけではなく、目録カードでは表すことができなかった件名や多くのキーワードが追加されました。さらに、著者名やシリーズ名リンクなどの機能が加わり、同一の著者・シリーズから資料を検索できることになったことにも注目できます。利用から遠のいていた本が検索ヒットすることにより利用された事例も何度か目撃しました。「蔵書に息吹を吹き込んだ作業」とも言えるのではないのでしょうか。

この作業を完了することができたのは、各学部の教授会の理解と、関係部局の後押しの結果であり、また、歴代館長・事務長をはじめとする図書館職員の総意でもありました。関係協力の方々には感謝申し上げます。また、遡及入力作業に直接あたったパート職員のみなさんにも感謝いたします。ランガナタンは『図書館学の五法則』のなかで「図書館は成長する有機体である」といっています。この作業の結晶が今後の図書館の礎となり発展することを願うものです。

## 公共図書館職員と共に 「地域・地区内コンソーシアム」について話し合い

—第9回福島県内大学図書館連絡協議会実務者研修会報告—

標記研修会は、11月29日(金)、公共図書館職員5名(市立2館、町立3館)を含め17館総数24名の参加のもと、本館会議室を会場として開かれました。県内の公共図書館職員と大学図書館職員が一堂に会するのははじめての機会です。活発な討議・意見交換が行われました。

二つの話題提供を受けて討議を進めました。

午前中には福島大学附属図書館の小椋正行さんから、当館の学外者利用についての経緯、ここ5年間の学外者利用の実態が数値をもとに話され、相互利用の拡大のためには、所蔵資料の横断検索の実現、県内版ILL方式(料金相殺)の確立、町村の公民館の参加による窓口の拡大等が必要であることが他県コンソーシアムの例を引きながら提起されました。

また、コンソーシアム内の協力内容として、共同購入、レファレンス、保存分担、相互研修などが検討対象となるだろうとの指摘がされました。

午後には福島県立図書館の三浦寛二さんから、公共図書館の相互協力の中心は現物貸借であり、それはNDL総合目録ネットワークを介して行われていること、現物貸借の送料負担は貸借関係館によって異なること(県内大学に貸出す場合は県立図が片道負担)が報告されました。

また、連携の内容として、公共図書館では対応できないレファレンス、相互利用制度の継続・活発化、

研修会の共催などがあることが話されました。

話題提供を受けた討議では、相互貸借の前提となる横断検索がぜひ必要であること、料金相殺制度はメリットがでるほどの件数(約200件)ではないのか、「共通利用証」はぜひ継続してほしいこと、地区内での協力体制がすでに組まれて運用されていること(例えば、田村郡内3館(船引・岩代・三春)の相互乗合)などの意見が出され、情報が提供されました。

また、地区内協力組織として、いわき明星大学図書館からは、相双地区をも加えた「浜通りコンソーシアム」(仮称)をぜひ作りたいとの意向が表明されました。

福島県内大学図書館間相互利用制度における「共通利用証」について、

その発給条件(研究者の認定)がまちまちでいろいろな混乱をもたらしているとの訴えがあり、県立図書館が参加館と調整することになりました。

最後に、事務局館から、本日提起・表明された考え・意見を整理し、福島県図書館協会とも相談しながら地域・地区内コンソーシアムの拡充に向けてより具体化していきたいとの方向が示されました。

その後にもたれた意見交換会では、福島大学附属図書館の河野忠市さんが、パワーポイントを使ってメタデータ・データベース(GeNiiを通じ提供されるインターネット上の学術情報DB)などについて説明し、関心を集めました。(図書館専門員 渡辺武房)



### 目次

- ・前向きに行こうぜ……………荒木田岳(1)
- ・フランス国立教育研究所図書館……………荻路貫司(2)
- ・思い出の一冊「山びこ学校」……………大川裕嗣(3)
- ・図書館活術を身につけよう!  
—カウンターの内側から—……………佐藤良子(3)
- ・「電子ジャーナル」ってナニ? ……福田一彦(4)
- ・購入資料案内「健康と社会福祉のための教育」  
……………佐藤理(5)
- ・購入資料案内「日本近代都市計画資料集成」  
……………今西一男(5)
- ・学内教官著作寄贈図書を紹介  
「近代政治理論の古典と現代」…伊藤宏之(6)
- 「西脇順三郎のモダニズム」……………澤正宏(6)
- 「日本を問いなおす」……………工藤雅樹(6)
- ・その昔 福島大学の近くにあった図書館(その1)  
「あぶくま山系農村図書館」……………渡辺武房(7)
- ・遡及入力作業の終了について……………情報管理係(7)
- ・第9回福島県内大学図書館連絡協議会実務者研修会報告  
「地域・地区内コンソーシアム」について 渡辺武房(8)
- ・目次……………(8)